

連作詩『スウィツァランド』考 —— 経験、反省、そして断念

桑 野 英 正

自分は自由党员である、と40代後半のマシュウ・アーノルド（1822-1888）は言う。続けて、同時代の急進的な二人の活動家その他の人物たちを比較対象として登場させ、彼らとの違いを次のように表現する。

わたしは、経験、反省、そして断念によって練られた自由党员であり、なかんずく教養の大切さを信じる者である。¹⁾

この文章の後半は小論の主題と直接関係しない。筆者が注目するのは前半である。この部分は、自由党が掲げる「平和、緊縮、改革」の標語をもじっているのだが、「Experience, Reflexion, and Renouncement」の3つの単語は、はしなくもアーノルドという人間の思考経路を示唆していると言っているだろう。文学を論じるにせよ、社会を論じるにせよ、はたまた政治を論じるにせよ、この思考の流れは変わることがない。そしてこの特質は、専ら詩歌の実作に励んだ20代後半から30代前半において、その作品のなかに色濃く滲み出ている。連作詩『Switzerland』の表題でまとめられた最初期の叙情詩数篇を取りあげ、1850年前後に、歌いながら考え、時代と境遇による不可避の道徳的判断の下に行動した、ある青年の、というかむしろある若い道徳的思索家の、心の軌跡を辿ってみたい。

I 青い瞳

1848年9月、ランズダウン卿の私設秘書をしていた25歳のアーノルドは、夏の休暇を利用してスイスに遊んだ。スイスが当時のイギリス人にとって定番の観光地であったことからいえば自然な選択であろう。しかし彼にとっては、いまひとつ特別な理由があった。スイスは、彼が愛してやまぬフランスの作家エティエンヌ・ドゥ・セナンクール（1770-1846）が数年を過ごした地でもあった。スイスからの便りという体裁の、この作者の主要な作品『オベルマン』に惹かれたアーノルドは、1849年、ということは、これから考察することになる『スウィツァランド』の詩歌群7つのうちの5つあるいは6つまでが書かれたのと同じ年であるが、この年に『「オベルマン」の著者を偲で』と題する183行の詩をモノしている。この作品についてはあとでまた言及することになるが、人の世に背を向け、自然の静かな厳しさに赴こうとする衝動、いわばかぎりなく死に近づこうとする衝動が一方の極にあったこと、このことをまず記憶にとどめておく必要がある。

ここでふたたび、他のもう一方の極にある、人との交わりを求め、人間の温かい激しさに赴こうとする衝動、いわばかぎりなく生に近づこうとする衝動にアーノルドが駆られた発端に話をもどそう。1848年9月29日、親友アーサー・ヒュウ・クラッフ（1819-1861）宛てに次のような手紙を書いている。

暖炉には火がはいっているというのに寒くってシャンペンをのまずにはおられない。頼んでおいたブラックコーヒーがもうすぐ来るはずだが、これであとしばらく書き続けることができるだろう。それというのも、この馬鹿でかいホテルで泊まり客は僕ひとりなんだ。ここ2・3日ものすごい雨だったが、今夜はとうとう霜になりそうだ。明日もう一度ジェミ峠を越え、トゥーン町へ行く。ホテル「大観楼」には青い瞳の、あの娘がいるので、あそこで一日のんびりしようと思う。それからケルンまでゆっくりとライン川を下り、そこからアミアン、ブ

ローニュ、そしてイングランドへと向かう。…²⁾

翌日おそらく会ったであろう青い瞳の女の子が、『スウィツァランド』にマルグリットという名で登場する人物であることはほぼ確実であると言ってよい。そしてちょうど1年後の1849年9月にこの若いフランス人女性と別れたことを我々が知ることができるのは、これもまた、1949年9月23日スイスのトゥーンからクラッフ宛てに出した手紙による。

僕は今のところ、快適とはとても言えない奇妙な心持ちでここにいる。
しかし明日、この疼く頭をあの中々まで、愛らしい花にも似た、僕の大好きなあの高い峰まで運ぶ。

窓のそとを全速力で
疾風が駆ける
氷が閉ざす峡谷めざし
広大な雪原めざし
あそこでは激流が悲鳴をあげる
喉笛を岩に塞かれて
そして雪崩が轟き
激流のかすれ声もやむ
僕は行く おお君たち山々よー
君たち激流よ 僕は行く

そう、僕は行く、しかし3日か4日したらまた一旦ここに戻り、そしてそれから心を鬼にして (ferociously) 遅くともいつまでにイングランドへ向かうことができるかやってみなければならない。³⁾

上に引いたアーノルド自身による2度の言及以外、この女性について知る手掛かりは何もない。不自然なまでに証拠資料が乏しいのは、一つにはおそらく近親者の配慮によるものだろう。モデル探しも行なわれたようだが、それはあくまでも推測にすぎない。客観的証拠不足はまた、『スウィツァランド』の内

容をそのまま事実と受けとる安易な解釈の原因ともなった。しかし繰り返すが、事実として明らかなことは、1849年9月に、前年の同じ時期にはじめて会った青い瞳の女と別れたということだけである。それも、アーノルドの言い分を信じれば、心を鬼にして彼の方から身を引いたということになる。この連作詩『スウィツァランド』に関して重要なことは、それまでのギリシャ・ローマの古典に材を求める姿勢とは別に、個人的な、きわめて個人的な体験、それも異性との恋愛体験に基づいて歌っていることである。後年彼がよく口にする、「詩歌は根本において人生の批評である」⁴⁾ という信念は、この連作詩あたりを起点にしていると言ってもそれほど間違っていないだろう。

II 歌の翼

ひとまとまりの連作詩『スウィツァランド』としてはじめて登場するのは、実名アーノルドを名乗って出版した1853年の『詩集』においてである。この連作詩を構成する数篇の叙情詩の大部分はすでに、前年度第2詩集として頭文字「A」のペンネームで上梓した、『エトナ山上のエムペドクレス、その他』に独立した詩歌として発表済みのものであった。ということは、そもそも同じ題名の下に繋ぎあわせてみようという着想自体に何らかの意図がありはしないか、と疑ってみたくなるのが自然だろう。しかも、最終的には7篇構成に定着する1877年版に至るまで何度かにわたり、構成する作品の差し替え、並べ替えを行っている。その結果、例えば、主人公の軽薄な側面は薄れ、逆にマルグリットの浮薄な側面が露になる。男の側から発言すれば得てしてこうってしまうようだが、問題はそういうことではない。

ある研究者は、『スウィツァランド』の原型がイギリス詩歌の本流のなかではなく他の国にある、と推論する。

マルグリット詩歌に及ぼした最大の影響はドイツの Liedercyklus（歌の環）であると思う。1850年までに十指に余る Liedercyklus がすでに書

かれていた。たとえ原作は知らなかったにせよ少なくとも歌曲のほうは、アーノルドもきっと知っていただろう。⁵⁾

例えば、原作者ヴィルヘルム・ミュラー（1794－1827）による『美しき水車小屋の娘』や『冬の旅』に見られる、誰もがなんとなく知っている、ありふれた内容と語りに一応乗っかったかたちをとりながら、アーノルドは叙情詩連作に新しい利用価値を見出だしている、というのである。

上の説を筆者なりに敷衍すれば、ある経験についての真実を他人に伝えようとするとき、相手になじみのない、見るのも聞くのもはじめての枠組みのなかで語るよりも、取っつきやすい伝統的な枠組みのなかで語る方がかえって自由がきき、効果もあがるということだろう。客を安心の船に乗せ、時間の流れに棹さしながら、船頭は自分の好きな歌をうたう。そうすることで、ある種の演劇空間が生まれ、徐々に真実が炙り出されてくる。ある女優にのめり込んでフランスまで追いかけていくほど演劇に少なからぬ興味のあったアーノルドであれば、こういった立体的な組立てに無関心であったとは考えにくい。

その場その時に好きな歌をうたえば、それらを繋いでみたときに内容につじつまの合わない箇所も当然出てくる。男が女を振る、女が男を振る、男は女に値しない、女は男に値しない、などなど歌っていることに一貫性がない。しかしそのような矛盾点こそ、かえって主人公の経験が真実であることを証明している、と別の研究者は論じる。⁶⁾ 斬込みの角度は違うけれども、狙うところはほぼ同じとみていいだろう。

III 別つ海

ここです、全体を構成する7篇の題名をあげる。

第1歌 Meeting『再会』

第2歌 Parting『別れ』

第3歌 Farewell『さようなら』

- 第4歌 Isolation. To Marguerite『孤立 マルグリットへ』
 第5歌 To Marguerite - Continued『マルグリットへー続き』
 第6歌 Absence『君はもういない』
 第7歌 The Terrace at Berne (Composed Ten Years After the
 Preceding)『ベルンの高台 (前作から10年を経て)』

16行から90行まで長さはまちまち形もさまざまな歌を通して、アーノルドは何についてどのように熟考 (reflect) したのだろうか。一年ぶりにあの町で、あの湖のほとりで君に会う。君はちっとも変わっていない。姿も、髪も、青い瞳も、－

またしても弾かれたように僕は決意する
 またしても怒りを含んだ
 割れるような神の声が聞こえる
 “言うことを聞いて 身をひけ”

第1歌『再会』9-12

突然、神様が出てくる。ギリシャ劇ではあるまいし、とつい思ってしまう。しかし、驚くことはない。筋はあらかじめ決まっているようなもので、主人公が大仰な身振りで嘆くさまを想像し、苦笑いしながら見得を切る役者に拍手を送っておけばよい。作者にすれば、ここで“別れる”という主題を導きだしさえすればいいのだ。第1歌から受ける感じはちょっとコミカルだが、第2歌は一変して深刻味を増す。とはいっても、この部分だけでなく全体が大衆演劇的な筋立てなのだから (その理由については上に述べた)、その分は当然差し引いて考えなければならないが。

ベートーベンの“運命”さながらに、第2歌は激しい音ではじまる。

君たち 秋のあらしよ！
 ヒュウヒュウと過ぎ去り ガタガタと窓を揺すり

ほのかな月あかりの湖に
君たちは白い波を立てる

第2歌『別れ』 1 - 4

白い、冷たいアルプスの山々へ一緒に連れて行ってほしい、深い静けさ (stillness) につつまれた所に身を置きたい、と歌いだす。と次には一転して、

しかし階段のあたりから聞こえてくる声は何だろう
朝のように軽やかで 清らかなことまるで朝のよう
.....

ああ 近づいてくるー
甘い調べよ こちらへ！

第2歌『別れ』 17-18、23-24

心に巣くう対立する欲求に苦しむ若者の心象風景が、一方にアルプス連山を、もう一方にマルグリットを表象とする数行の聯を交互に重ねることで描き出される。山蜂がときたまブーンと音をたてるぐらいで、他に命あるものの気配は全くない“死”の世界と、青い瞳、柔らかな髪、可愛い唇の“生”の世界のあいだで青年は迷う。しかしまたしても都合よく神が、ではないけれどもそれに近い助け船が現れる。女の側にみだらな“過去”があったのだそうさ。そこでふたたび、田舎芝居の、ケレン味たっぷりの演技に私たちはつきあわされる羽目になる。このあとは言うまでもない。主人公は“女”を捨て (renounce), “自然”を選ぶ。

許してくれ！ 許してくれ！

ああ マルグリットよ

この腕を伸ばして君を抱きしめたい

しかし 駄目だ！ やっぱり駄目だ

空中を 君のほうに向かって

両腕を思いきり伸ばす
 しかし僕たちのあいだで海がうねる－
 僕たちの異なる過去が！

第2歌『別れ』59－66

両者の立場が逆転したらどうなるだろう。愛し合った二人であるが、時が流れ、男のふがいなさに女は愛想がつきる。それなのに、女の熱が冷めたことを男は責めるどころか、落ち度は自分の優柔不断にあると言う。男は男らしく女は女らしくの道德規範を建て前とする社会のなかで自分は落伍者だ、しかし、肉体的な力も精神的な力も極々ありふれたもので、それにくらべ愛（love）はどこにでもあるとういうような代物ではない、あなたにもそのうちきっと分かるだろう、その時まで『さようなら』、と第3歌はうたう。しかし問題は、「その時まで」にある。この世のことではない。命つきて、旅立った別世界においてなのだ。キリスト教的な来世のなかで、ゲートからの影響らしい、魂と魂の真の結びつきを語るかと思うと⁷⁾、次にこちらはクラップからの手紙にヒントを得たらしい、天の軌道をわたる星にまで話は及ぶ。⁸⁾

何度読み返しても説得力のない、シリーズのなかで一見浮き上がっているかにみえる第3歌についてどう考えたらいいのだろうか。おそらくその鍵となるものは、締め括りの数聯ではなかろうか、と筆者は推測する。

この世で歩いた道は違うけれど あの世では
 もっと隣り合った進路を進むかもしれない
 お互いの距離がちぢまり 大空のあちらとこちらで
 挨拶をかわすことがあるかもしれない

さぞかしいい気持ちだろうな わが妹にも似た人よ
 地上の雑音が届かない所で きらめく星に囲まれて
 その静けさに また月影照らす海原の その穏やかさに
 君と一緒にいつまでも浸りつづけるのは！

第3歌『さようなら』73-88

第2歌では、恋人をあきらめることでまがりなりにも心の平安を得た。しかしそれは、若者にとって満足のいく決着では決してなかった。自分ひとりの心を救うことだけに努めるのは彼の信条に反する。連れ添う者を、同胞を、人類を神の国へ、宗教ぬきで言えば人間としての完全性へ導く努力、これこそがこの男の、そしてそれはそのままアーノルドの生き甲斐であった。従って、たとえぎこちない詠みぶりではあっても、共に救われたいという願望を、思索のこの段階で早々と捨て去る（renounce）ことはできない。

超現実の土俵の上で一人相撲を取っている分には負ける悔しさもありえないが、現実に関わり取りくむ相撲ではなかなかこちらの考え通りにはいかない。君のことをこれほど思っているのだから君のほうも僕のことを負けず劣らず思ってくれている、という悲しい錯覚におちいることが往々にしてある。第4歌の男がまさしくその一人。気付くのが遅すぎた、と彼は嘆く。

心は自分の手で自分を縛ることだってある
 信頼に信頼が返ってこないことだってよくある
 自分で自分を揺さぶって 人の気持は満ちたり引いたりー
 君はもう僕を愛していない さようなら！ さようなら！

第4歌『孤立 マルグリットへ』9-12

自分のなかにあるすべてを燃やし、その燃焼力をバネに愛する人の心に飛び込もうとする試みは、かくして報われることなく終わる。羊飼いの若者エンディミオンに恋し、軌道を離れて通いつめた月の女神ルナの例がある。しかし、あちらは神様、こちらは生身の人間。所詮人間はひとりぼっちということは始めから分かっていたはずじゃないか。それが分からないのはよほどオメデタイ人たち。二人の心が一つにとけあい、信頼しあうことで果てしない孤独からのがれることができると“夢想”している人たち。ほんとは一人っきりののに、その真実に気付いていない人たち。さびしいわが心よ、と落ち込んだ男は呼びか

ける。

もとの孤独へもどれ！

第4歌『孤立 マルグリットへ』18

第4歌を橋渡しに、この歌の連なりはクライマックスの第5歌に移る。愛に関する若い男女間の蹉跌であったはずのものが、巧妙にも人間の個と個のあいだの乖離という一段と大きな、より普遍的な主題に切り替わる。もしこの第5歌がなければ、このシリーズは盛り上がりのない、単なる愛の歌の羅列に終わっていただろう。第5歌『マルグリットへー続き』は、思想と風景が渾然一体となっている点で、有名な『ドーヴァ海岸』に相通じる。しかし絶望、あるいはその裏返しの願望で終わる前者に対し、“ああ、愛する人よ、お互いに信じ合おう”と歌う後者には、絶対者への信仰（Faith）が薄れた時代の、個々人の信頼（faith）にすぎるしかない必死の姿が垣間見える。程度の差こそあれ、当時いやしくもモノを考える人間は、手探り状態のなかで何らかの救いを求めようとしていた。『ドーヴァ海岸』はそのアーノルド版というわけである。ところで、本題から少しずれた。深い孤独感と切ないあこがれをうたう第5歌にもどろう。ただまたしても最終聯で、“A God, a God…”とカミに登場されると些かとまどってしまうのだが。

そうなのだ！ 人生の大海で島となり／ お互いのあいだに
 銜する瀬戸を置かれ／ 岸なき大海原に点々と散らばって／
 我々何百万何千万の人間は“ひとりぼっちで” 生きている／
 島々は 抱きすくめる潮の流れをその肌に感じ／ そして
 そのとき島々は 果てしなく遠い 他の島々との境界線を思い
 知る／

しかし 月の光が島々の洞穴を照らし／ 春の香りが島じゅう
 に漂い／ 谷間で 星の夜 小夜鳴鳥がすばらしい声で歌をう

たい／ その美しい歌声が 岸から岸へと 水路をわたり海峡
をこえて降りそそぐー／

ああ！ そのとき 絶望にも似た切望が島々の一番遠い洞窟ま
で送り届けられる／ それというのもむかし我々は（と島々は
思う） 確かにただひとつしかない大陸の一部であったから！
今 我々のまわりには 海原がひろがるー／ ああ 我々の端
と端がもう一度つながることができたら！／

第5歌『マルグリットへー続き』 1－18

IV 灰色の瞳

一篇の叙情詩が感動を瞬間に閉じ込めることであるとすれば、それを繋げた
数篇は感動を時の流れのなかで風化させることであると言うこともできるだろ
う。第6歌は、時の経過のなかで主人公の身边に変化があったことを告げる。

この麗しい別人の 灰色の瞳のなかに
愛する人よ！ 君の瞳が見える。
震えが走る 過ぎゆく歳月はかくも遠く
君から僕を引き離していたのか！

第6歌『君はもういない』 1－4

この男の考えを、またこの男の置かれた状況をここまで追ってきた今、マル
グリットだけでなく、第2歌で選んだはずの“自然”をも彼が renounce した
ことを我々は知る。マルグリットと別れた経緯は語られつづけてきたが、何故
彼が“自然”に、すなわちセナンクールに別れを告げたのか、『スウィツァラ
ンド』の詩歌を読んでいるだけでは分からない。始めに予告していたことだが、
我々はここで、1849年9月末から11月のあいだに書かれた『「オベルマン」の

著者を偲で』に立ち寄る必要がある。⁹⁾

この混乱した時代にわが道を歩んだひとは三人しかいない、と詩人は言う。ワーズワース、ゲーテ、そしてセナンクール。先の二人はそれぞれの意味で別格であり、お手本にはならない。それになによりも、今の時代は悪化の度合いが違う。今の世の中には、ゆっくり構えて成熟する身の置き所がない、ゆっくり構えて知恵を身につける暇がない。そこでセナンクールに、先生はあなただ、と彼は言う。五感を研ぎすまし、死のように動かず、堪え忍びつつ、人の世を眺めわたす。周りでは、移り変わる自然がさまざまな姿であなただを慰める。咲き乱れる花々、白い峰々に映える夕日、夜風にゆれる松が枝の奏でる調べ—あなたは思わず涙ぐむ。

去れ！ 人をあざむくしか能のない夢よ
そしてあなた、さびしい先達よ、ごきげんよう！
私は行きます 運命が私を追い立てます しかし
わが命の半分は 此処 あなたのもとに残します

私たちは 正体不明の強大な雇主のもとで
過酷な仕事に明け暮れます
楽しみたい時に 楽しむこともできず
辞めたい時に 辞めることもできません

私は俗世で生きなければなりません しかしあなたは
.....

『「オベルマン」の著者を偲で』 129-137

感傷に浸ることを自分自身に禁じ、“I in the world must live”と彼は意を決する。この覚悟はおそらく、第3歌に関して述べたように、自分ひとりが平安を得ることを潔しとしない、ある種の使命感に由来するのだろう。偉大な教育者であった父親の薫陶によるものなのか、時代が彼に要請したものなのか、

それとも字義通り「運命」が彼を追い立てたのか。いずれにせよ、後に「優雅なエレミア」¹⁰⁾と揶揄される素因は若いアーノルドのなかにすでに芽を出しはじめていたということができるだろう。しかしここで留意しなければならないのは、“but I leave half of my life with you”という条件付きの、実社会回帰であるという点である。「わが命の半分」、すなわち「セナンクール的なもの」、また同時に「マルグリット的なもの」は、かの地に残されたままなのである。片足を岸に置いたまま、もう片方の足で水深を測ろうとするに似ている。危険を感じれば片足を水から上げさえすればいいのだ。この場面での彼の言いようは、よく言えば中庸をえた、わるく言えばどことなく吹っ切れない、この知識人の姿勢を皮肉にも象徴している。

象徴していると言え、*「灰色の瞳」*は一層その感がつよい。日本人の感覚でモノを言おうとしていることは十分承知した上で言うのだが、黒でもなく白でもない灰色 (grey) の瞳の持ち主を選び取ったことに不思議な暗合を筆者などは感じるのだ。第6歌の、この瞳の女人が、1851年6月に生涯の伴侶として選んだ判事の娘フランシス・ルーシー・ワイトマンであることは定説である。有力議員の私設秘書という不安定な収入源を理由に義父となるひとの承諾を得られなかったアーノルドは、この年視学官の職につくことになり、晴れて一家をかまえる運びとなった。しかし地方回りを伴うこの仕事は決して楽ではなかった。つよい不満をもっていたことは妻への手紙からもうかがえる。¹¹⁾「過酷な仕事に明け暮れる “We move on a rigorous line”」を実践躬行することになったわけである。*「灰色の瞳」*が夢と現実の中間を暗示するかに思えて、その偶然性がおもしろい。

身をおちつける場所を確保した今も、心のおちつく先はまだはるか遠い。明かりは見える。そこへ向かって船を走らせる。愛のあらしが邪魔をする。

明かりにたどり着こうと僕は懸命になっている 君たち
 愛のあらしよ 君たちを切に求めたことも前にはあった
 だがもし明かりと共存できないのであれば
 君たちが退場することに僕は耐える

明かりにたどり着こうと僕は懸命になっている　しかし
 ああ　夜がまだ冷えるあいだは
 不毛の　あらし吹く　時の流れの上で
 マルグリットよ　今しばらく一緒にいてくれ

第6歌『君はもういない』13-20

ここでゆっくりと幕が下り、拍手喝采があるかどうかはともかく、6幕物『若きアーノルドの、悩み先取り・克己達成願望』劇は終わる。病的なまでに駆けまわるにしては目標はばらばら、頭はくたくた、心はすかすかの「現代の奇病¹²⁾」が蔓延する世の中をこれから生きようとする若者の不安とあがきの物語である、と筆者は今のところ読み解いている。

V　あるがまま

幕が下りた、と言っておきながらそれを否定するようなことになるけれども、じつはもう一幕ある。アンコールの声などかけた覚えはないが、主役はまだ歌い足りないらしい。1859年6月、すなわち前回の訪問からほぼ10年後、アーノルドは曾遊の地ベルンに滞在する。最終歌である第7歌はその折りの感懷を歌っている。

十年！一起きぬけのわたしの眼に
 ベルンの屋根瓦がふたたび姿をみせる
 岩また岩の川の兩岸　高い台地
 川の流れ！—また去り難くなるのだろうか

第7歌『ベルンの高台（前作から十年を経て）』1-4

たぶん高台にあるホテルの窓からかあるいはベランダからかであろう、遠い空

の高みには雲が浮かび、ユングフラウの雪がおぼろにかすんで見える。しかし近くに眼を移すと、緑の野原は日の光にあふれ、アール川がその野原のなかを流れ下っていく。川の流れを追っていく男の眼は、吸い寄せられるようにあのホテル『大観楼』まで行き、そして止まる。

わたしのマルグリットはまだあそこにいるだろうか。

第7歌『同上』12

男はさまざまな場合を想い描く。まあ！ あなたなのね、と喜びもあらわに彼の胸に飛びこんでくるだろうか。それともずっと以前に故国フランスへ帰り、安衣装に厚化粧の、バカ笑いする商売女に身を落としているだろうか（この箇所の描写などは、第Ⅱ章で述べた理由で典型的な紋切り型である。）それともすでにこの世から消えてしまっているだろうか。それにしてもなんの予感も覚えなかったとは！あるいはひょっとしてまだ生きているかもしれない。しかしそうだとすればすっかり変わってしまっているだろう。むかしの面影を求めるなんて詮ないことだ。彼女がどうなっているか知ってどうするというのか。命あるものはいつかは滅びる。

果てしない大海原でゆきあい　そしてゆきかう
漂い流れる丸太のように
そのように人生の大海で　ああ！
人は人に出会う―出会い　そしてふたたび別れる

若い頃からこのことは頭で分かっていた
若さが過ぎた今は、このことを肌で感じている
―山に霧がかかっている
マルグリットに逢うことはもう二度とないだろう

第7歌『同上』45－52

And Marguerite I shall see no more. — この最終行は、上に言及した『「オベルマン」の著者を偲で』のなかでアーノルドがスイスに残してきた「わが命の半分」をここで renounce したことを意味する。すなわちロマンチックな愛に、俗世間から逃れることに、そして青春そのものにピリオッドを打ったということである。この第7歌で掉尾を飾ることによって歌の環が厳密な意味で完結したにとどまらず、連作詩全体を味わい深いものにしている。語りが陳腐であることはすでに触れた。そしてそれが多分に意図的なものであるということも言った。しかしこの一連の歌でアーノルドが reflect した人間存在についての根本的な問題は、たとえその表現は未熟であれ、時代を問わず避けて通ることはできないだろう。19世紀後半のイギリスにおいてこの問題は特に重要であった。それについて論じる力はもとより筆者にはないし、またこの小論の目的でもないが、このたび上のような文章を綴る準備をしているなかで目に留まり、おもわず膝を打った、ある研究者が記した数行を引用〔但し、孫引き〕することでこの論考の終りとしたい。

ヴィクトリア朝初期および中期のひとたちが書いたものを読めば読むほど、心配や不安 (anxiety and worry) が彼らのことを理解する主要な糸口であるということが分かってくる。彼らはひとりよがりの妥協者ではなかった。対立し相容れないものを結びつけようとした。そしてうまく行かず、そのために悩んだ。…¹³⁾

テキスト

C. B. Tinker and H. F. Lowry(ed.) : Arnold—Poetical Works, Oxford University Press, 1950.

注

- (1) R. H. Super(ed.) : The Complete Prose Works of Matthew Arnold Vol. 5 Culture and Anarchy with Friendship's Garland and Some Literary Essays, The University of Michigan Press, 1965, p. 88.
- (2) C. Y. Lang(ed.) : The Letters of Matthew Arnold, Vol. 1, The University Press of Virginia, 1996, p. 119.

- (3) *ibid.* p. 156. 詩歌の部分は『スウィツァランド』第2歌「別れ」25-34にほぼそのまま使用されている。
- (4) R. H. Super(ed.) : The Complete Prose Works of Matthew Arnold Vol. 9 English Literature and Irish Politics, The University of Michigan Press, 1973, p. 46.
- (5) G. Robert Stange : Matthew Arnold—The Poet as Humanist, Princeton University Press, 1967, pp. 213-248.
- (6) L. Trilling : Matthew Arnold, Columbia University Press, 1949, p. 122.
- (7) K. Allott(ed.) : The Poems of Matthew Arnold, Longman, 1965, p. 127.
- (8) *ibid.* p. 128.
- (9) *ibid.* p. 129.
- (10) R. H. Super(ed.) : The Complete Prose Works of Matthew Arnold Vol. 5, Culture and Anarchy with Friendships's Garland and Some Literary Essays, The University of Michigan Press, 1965, p. 88.
- (11) C. Y. Lang(ed.) : The Letters of Matthew Arnold, Vol. 1, The University Press of Virginia, 1996, p. 286.
- (12) C. B. Tinker and H. F. Lowry(ed.) : Arnold—Poetical Works, Oxford University Press, 1950, p. 261, 『The Scholar-Gipsy』1. 203.
- (13) D. Daiches : Some Late Victorian Attitudes, André Deutsch, 1969, p. 32.

その他の参考書

- I. Hamilton : A Gift Imprisoned : the Poetic Life of Matthew Arnold, Bloomsbury, 1998.
- C. Machann : Matthew Arnold : A Literary Life, St. Martin's Press, Inc., 1988.
- N. Murray : A Life of Matthew Arnold, Hodder & Stoughton, 1996.
- 成田成壽 : M. Arnold, 研究社 (英米文學評傳叢書), 1934.

October 31, 2000